

文献から考察する看護基礎教育における 国際看護学教育の現状

The Current State of the international nursing science education
in the nursing basic education to consider from documents

久保宣子・山野内靖子・蛭田由美

要約 本研究の目的は、今後の看護基礎教育における国際看護学教育の課題を検討することである。20件の研究文献を分析した結果、国際看護学の教育について以下の示唆が得られた。海外体験（研修）は国際性を備えた看護職の育成のために効果的な教育方法である。中央教育審議会が学士力として唱える多文化・異文化に関する知識の理解につながる教育である。必修科目として学部教育に定着してきている。看護基礎教育における国際看護学教育では、コンピテンシーモデルの構築および能力開発という点で、いまだ不十分である。共通した教育理念や教育目標は見出すことができなかったことから、コンピテンシーモデルの構築および能力開発、共通した学習目標の明文化は重要な課題と考える。

I. はじめに

わが国の看護職の海外活動は、半世紀以上の歴史をもち、多くの看護職が海外に派遣され活躍している¹⁾。こうした中で、看護教育の役割として、世界の人々が置かれている生活や健康の現状を理解し、日本の看護職として国際的な看護活動を展開できるような看護職を育てることが重要となる。2008年中央教育審議会は、培う学士力として、「多文化・

異文化に関する知識の理解」を位置付けた²⁾。その後2011年に文部科学省は、学士課程における看護系人材養成として国際性豊かな人材養成を目指すこととした³⁾。

こうした国の方針を受けて、全国の看護師等学校養成所では大学・短期大学・専門学校それぞれに教育課程の中に「国際看護学」関連の教科目を位置付けて授業を展開してい

る⁴⁾。看護学生を対象とした国際看護学関連の授業後の学習成果や国際交流活動に関する意識調査等が行われている。

日本における課題として中越らは、わが国の看護基礎教育学、助産師教育学における学習目標は明文化されておらず、実際の教育内容は各大学によって様々であり、大学により

国際看護・助産教育に大きな差が生じていることを指摘し、わが国の特徴をふまえた国際看護教育プログラムの開発の必要性を提言している⁵⁾。

これまでに行われた研究から看護基礎教育における国際看護学教育に関する研究の動向や教育の特性を考察した文献はみられない。

II. 研究目的

看護基礎教育における国際看護学教育に関する研究の動向から、誰を対象にしたどのような研究が行われ、何が明らかにされている

かを整理し、今後の看護基礎教育における国際看護学教育の課題を検討することである。

III. 研究方法

1. 研究デザイン

本研究は、文献分析による質的記述的研究である。

2. 文献の収集方法

国際看護学の教育に関する国内の研究文献を収集した。文献検索に使用したデータベースは、医学中央雑誌 Web であり、キーワードは「国際看護」「教育」を組み合わせ、2007年から2015年までの8年間の研究文献を検索した。その中から、国際看護学教育に関する研究文献を選択した。原著論文に加えて、報告・資料も分析対象とした。

3. 検討方法

対象となる20件を詳細に分析し、著者、発行年、研究の種類、タイトル、掲載誌、研究目的、対象者、データ数、研究方法、主な結果、考察について研究文献ごとに分類し一覧表にした。さらに、「国際看護教育学に関する研究の概要」「海外体験（研修）をもとに国際看護学について明らかになったこと」「学生の国際看護学に対するイメージや意識に関すること」「教育機関の国際性を備えた看護職育成の取り組みについて」検討・整理した。

IV. 結 果

1. 国際看護教育学に関する研究の概要 (表1)

分析対象とした文献は20文献であった。文献が掲載された年は、2007～2015年である。2007年は4件、2008年は3件、2009年は1件、2010年～2013年は各2件、2014年は4件、2015年は2件であった。著者数は、1～8名であり、共同研究は14件であった。原著論文は1文献、資料が7文献、報告が4文献、実践報告が3文献、活動報告・実態調査・短報・意識調査・研究ノートが各1文献であった。また、20文献中8文献（文献1・8・10・11・14・15・18・19）では、海外体験（研修）や国際交流、国際ボランティアの体験をもとに研究がすすめられていた。その8文献のうち、学士課程の学生を対象にしたものは5文献（文献1・10・11・15・18）であった。研究の対象は、学士課程の学生を対象にした研究が10文献（文献1・2・3・4・5・6・9・10・11・15・18）、修士課程の学生を対象にした研究が2文献（文献8・20）、国内の教育機関を対象にした研究が2文献（文献16・17）、看護師を対象にした研究が2文献（文献14・19）、看護学科の教員を対象にした研究が1文献（文献10）、看護専門学校生を対象にした研究が1文献（文献7）であった。一覧表にして分類・検討した結果、「海外体験をもとに国際看護学について明らかになったこと」「学生の国際看護学に対するイメージや意識に関すること」について研究が行われていた。

2. 海外体験（研修）をもとに国際看護学の学習について明らかになったこと

1) 海外体験（研修）の渡航先と目的

海外研修等の学生の海外体験（研修）に関する報告は6文献で、そのうち学士課程の学生を対象としたものが5文献（文献1・10・11・15・18）、修士課程の学生を対象としたものが1文献（文献8）であった。

学士課程の学生を対象にした海外体験（研修）の渡航先は、カンボジア・タイ・米国・オーストラリア・ベトナムが挙げられた。目的は、必修科目による履修・短期留学・国際交流・国際ボランティアであった。海外体験（研修）の内容は、5文献中すべてにおいて現地の施設見学が行われていた。2文献（文献10・15）では、日本語または日本語通訳で現地の教育機関において講義が行われていた。レクリエーションによる交流・ボランティア・演習は、各1文献で行われていた。

修士課程の学生を対象にした海外体験の渡航先は、カンボジアで1文献（文献8）であり、目的は国際保健助産実習であった。

看護師を対象にした海外体験の渡航先は、開発途上国が2文献（文献14・19）であり、目的は国際協力活動であった。

2) 海外体験（研修）による学び

学生は、海外体験（研修）の結果、発展途上国への関心を深め、何らかの形で国際貢献をしたいと動機付けられ、国際交流が国際貢献のきっかけになると認識していた（文献1）。学生が学びを得ている視点は、医療実践・看護実践・医療スタッフの3点に大別された

表1 国際看護教育に関する研究の概要

番号	研究課題	種類	著者	発行年	目的	方法	対象	結果
1	学生がでる国際貢献—2006年度カンボジア研修報告	報告	岡本亜紀 他3名	2007	学生の海外研修から国際貢献のあり方を考える	学生の体験や感想文からの考察	看護学科1年6名、2年2名、2年2名、 幼児教育学科1年2名、2年2名	学生は、海外体験(研修)の結果、発展途上国への関心を深め、何らかの形で国際貢献をたいと動機づけられ、国際交流が国際貢献のきっかけになると認識していた。
2	「国際看護」の授業後アンケートにおける一考察	実践報告	磯邊厚子 他1名	2014	国際看護の授業後アンケート結果の内容を明らかにし、国際看護の役割を改めて考察し、今後の授業実践の向上につなぐ	看護学科3年過程の108名の学生に授業後アンケートの結果を類似内容に整理	看護学科3年過程の108名	「国際事項」は109件の回答があり、保健師や生活、教育に関する事項が多かった。「看護の役割」は110件の回答があり、疾病予防、健康教育の必要性が最も多かった。
3	看護学科1年生に開講した「国際看護」の効果に関する検討	短報	高橋亮 他3名	2015	1回生で「国際看護」を学ぶことの効果を明らかにする	41名対象の質問紙、単純集計と自由回答は類似性	看護学科1回生	多くの学生は講義終了後に自身に変化があったと回答し、視野の広がりが多様な人材の育成に世界に対する思考の発展などへの効果があった。また、国際看護や海外についてももっと知りたいなどの興味関心を引き起こす効果もあった。
4	看護学教育における国際交流活動に関する学生の意識調査	意識調査	西澤知子 他4名	2014	看護系の大学または看護学部学生の国際交流活動や国際看護に関するニーズを明らかにすることおよび、国際交流に関するニーズと意識を知ることに加え、現在本学部で実施している国際交流活動が、学生のニーズや興味と合致したものであるかを評価し、推進するための資料とする	124名の質問紙で単純集計と自由回答はカテゴリ化	看護学科在学1～4年生	国際交流および海外の看護事情について関心がある学生は、70.2%と関心がない学生を上回っていることが明らかになった。海外での学生研修への希望は約半数であった。国際交流活動と海外での学生研修に関する希望は、「留学・海外研修の希望」「活動拡大への希望」「現在実施されている活動に対する評価」の3つのカテゴリで抽出された。
5	日本人看護学生への国際保健看護教育科目の開講時期を検討	資料	入山美美	2010	日本人看護学生に国際保健看護教育科目を開講する最適な時期を検討	計223名のアンケート調査と定期取組	看護学科3、4年生	4年次で開講することにより、学習効果が高まる可能性がある。
6	大学生の国際保健、国際看護のイメージに関する意識調査—日本・台湾・フィジーにおける比較	資料	吉木清 他7名	2011	3か国の大学生の国際保健及び国際看護のイメージを調査し、世界の国際協力力の相違点にある大学生の国際保健および国際看護に関する教育や研修を含む人材育成に向けた検討資料を得ること	3か国合わせて計466名の調査票	日本人学生は、看護学科4年生、経済学部、理学部、文化教育学部、理工学部2年生、台湾大学生は、医学管理科2年生、フィジー学生は、週1～4年生	「国際看護」のイメージについては、「発展途上国における看護協力」と答えた学生は、日本人看護学生の92%、日本人医学生の92%、フィジー大学生の40%、台湾人大学生の53%であった。3か国の多くの大学生が「国際保健」「国際看護」に大きな関心をもっていた。
7	国際看護の授業展開へ向けての考察—看護学生が抱く「国際看護」のイメージの分析—	実践報告	塚本三枝子	2013	受講前の学生の「国際看護」に対するイメージを調査し、学生の抱く国際看護への認識を分析し国際看護の授業展開の方向性を定めること	質問用紙を用いた質的帰納的研究メソッド(KJ法)469名	看護専門学校2、3年生	最も多い国際看護のイメージは、途上国の医療支援であった。
8	カンボジアでの国際保健助産学実習に置ける大学院生の体験	資料	鈴木美恵子	2011	カンボジアでの国際保健助産学実習に置ける大学院生の体験を明らかにする	半構造的面接を行い質的記述的に分析	大学院生3名	【カンボジアの現実を認識する】【カンボジアの医療や看護教育を批判的に見る】【異文化として承認する】【カンボジアの文化に思いやりを持って関わる】【自分自身から学ぶ】【国際貢献への動機付け】7つのカテゴリが抽出された
9	タイ国、ブラバク大学における国際看護論の発展と学習成果	活動報告	東田吉子 他2名	2015	タイ国とタイ国の保健状況を理解する類似点、相違点およびその背景を考察する	11項目からなる評価アンケート	看護学科4年生14名	他の状況を理解することは、日本の状況理解することにつながっていた。体験を通して国際的な視野を広め、将来のキャリアにつながる学習意欲が強く意識づけられた。
10	海外ボランティアを行う看護学生向けに、ボランティアに必要となるスキルとボランティアのタイムマネジメントにおけるボランティア活動を通じた学習体験評価—	報告	長松恵子 他7名	2007	タイのコミュニケーションにおけるボランティア活動を行う学生の困難を明らかにし支援についての資料を得る	デイクラスの逐語録をカテゴリ化	看護学科4年生8名と教員4名	学生が直面した困難は、文化の違い、コミュニケーション、ボランティア活動の参加の仕方、異文化に伴う心身疲労、看護ケアの準備不足や日本と異なる方法であった。
11	米国メイヨー・メディカルセンター—短期留学生における学生の体験と学び	研究ノート、資料	石井美里 他4名	2007	学生がどのような視点で学びを得ているのかを明らかにする	レポートとアンケートを整理し質的な分析	看護学科3、4年生の35名	医療実践・看護実践・医療スタッフの3点に大別された
12	英国における外国人看護師受入れ研修	報告	織田紀子	2008	英国における外国人看護師受入れ研修について報告し、今後の日本におけるヒートンを提	英国における外国人看護師受入れ研修について報告	看護師	日本においても外国人看護師が守られながら、その能力を発揮できるシステム構築が必要なのは必至である。

番号	研究課題	種類	著者	発行年	目的	方法	対象	結果
13	米国私立総合大学看護学部 2007年訪問調査から	研究ノート	Kishi Keiko Imai	2008	訪問調査の目的は、国際学術交流の可能性を 探求し、米国の看護の姿が政策にどう影響さ れているかを理解し、その結果をもとに本校の 看護教育に活用する国際交流について提 言すること	米国私立総合大学看護学部の 訪問調査報告	看護教育機関	日本における大学の国際人道的活動を看護大学教育にとり いれるための研究と研究発表が必要である。
14	国際協力活動中略看護職の コンピュータリテラシー獲得の過程一赤 十字国際活動に促進した看護 職の体験より一	資料	大澤絵里	2010	国際協力活動に貢献する中堅看護職が、国際 協力活動に必要なコンピュータリテラシーを 習得する過程を明らかにすること	半構成的面接法を行い、質的 分析法	中堅看護職2名	異文化での生活、組織や人間関係の理解に難しさを感じ、 自己の価値観を築く柔軟性、活動調整能力、人材管理 能力、活動推進のための周囲のサポートを得る能力を理 得していた。
15	海外研修を通しての国際看護 教育一学習意欲の変化と研修 満足度一	実践報告	山口美子 他1名	2013	看護学学生への国際看護・国際交流に及ぼす 看護学学生への学習意欲の国際研修前後の 変化、満足度の国際研修前後の国際研修 前後、海外研修後の満足度について検討 のか、海外研修の後の満足度について検討	質問紙調査票 Friedman 検定 および Wilcoxon の符号付順位 検定	看護学部3年生77名	国際看護・国際看護に関連科目を開設している 大学院のみで国際看護・国際看護に関連科目を開設してい ない大学院を比較し、海外研修前後に高まり、海外研修参加後は全員が研 修に対して満足していたことが明らかになった。
16	わが国の看護基礎教育におけ る国際看護教育の現状と課題	資料	中越利佳 他4名	2014	わが国の国際看護教育の現状と国際看護 に必要となる看護教育の現状を明らかにし、看護 基礎教育における国際看護教育のあり方を 検討するための基礎資料とする	自己式質問紙調査 SPSS	国内の看護系大学72校	大学院のみで国際看護・国際看護に関連科目を開設してい ない大学院を比較し、海外研修前後に高まり、海外研修参加後は全員が研 修に対して満足していたことが明らかになった。
17	看護基礎教育における英語教 育の現況調査一福岡大学・ 短期大学・専門学校 の結果から一	実践調査	口元志麻子 他1名	2009	看護基礎教育における英語教育の現状を把握 する	質問調査	国内124機関	教育機関により、英語教育が量的・質的に異なる傾向が ある
18	国際看護学実習前後の学生の 意識の変化	資料	須藤英子 他1名	2014	国際看護学実習前後の学生の意識の変化を明 らかにする	自己式質問紙調査カテゴリー 化	看護学部4年生101名	国際看護学実習は、学生に蓄積された国際看護学の基礎 的知識を具現化するのに効果的な教育方法のひ とつと、看護基礎教育で学ぶ本質や看護のあり方を効果 的に体験でき、国際性の育成のための早期基礎としての 役割を有していた。国際看護学実習に関する意識が3因 子、国外実習の期待との温度では4因子、国外実習 への期待で3因子、国際性の準備では4因子が明らか かとなり、実習前後での変化がみえた。
19	国際看護学コロポネーターに必 要な能力モデル構築と教育プ ログラムの開発	原著	林直子 他3名	2008	日本人国際看護コロポネーターが認識する 活動上の課題・問題と継続学習のニーズを明 らかにし、国際看護コロポネーターに必要な 能力モデルを構築すること、国際看護コロポ ネーターに必要な能力を養成する教育プログ ラム（大学院修士課程レベル）を開発すこ と	インタビューガイドに基づき 半構成的個別面接を行い、分 析・カテゴリー抽出	一年以上国際看護協力の活動 に関わった者、あるいは関わっ ている専門家の27名	大学院教育においては、国際看護コロポネーターに必要 な能力および活動への影響因子として「基礎的資質」と知 識」と「国際協力を展開する上で求められる能力」大別 される55カテゴリーを抽出された。教育目標は、 項目を定めた教育プログラムを作成した。教育目標は、 ①国際看護に関する基礎的資質を基に専門的な知識を深 めめる②国際協力分野における看護課題に処して、異 なる文化、社会・経済、保健医療看護システム等をふま えての国際看護の推進に貢献できる③協力を相手国の看護 ニーズに対応した協力・支援計画ができる④カテゴリー、 ⑤国際看護の推進に貢献できる⑥国際看護の推進に 貢献できる⑦国際看護協力の発展に貢献できる⑧国際看護協 力の発展に貢献できる⑨国際看護協力の発展に貢献でき る⑩国際看護協力の発展に貢献できる⑪国際看護協 力の発展に貢献できる⑫国際看護協力の発展に貢献でき る⑬国際看護協力の発展に貢献できる⑭国際看護協 力の発展に貢献できる⑮国際看護協力の発展に貢献でき る⑯国際看護協力の発展に貢献できる⑰国際看護協 力の発展に貢献できる⑱国際看護協力の発展に貢献でき る⑲国際看護協力の発展に貢献できる⑳国際看護協 力の発展に貢献できる㉑国際看護協力の発展に貢献でき る㉒国際看護協力の発展に貢献できる㉓国際看護協 力の発展に貢献できる㉔国際看護協力の発展に貢献でき る㉕国際看護協力の発展に貢献できる㉖国際看護協 力の発展に貢献できる㉗国際看護協力の発展に貢献でき る㉘国際看護協力の発展に貢献できる㉙国際看護協 力の発展に貢献できる㉚国際看護協力の発展に貢献でき る㉛国際看護協力の発展に貢献できる㉜国際看護協 力の発展に貢献できる㉝国際看護協力の発展に貢献でき る㉞国際看護協力の発展に貢献できる㉟国際看護協 力の発展に貢献できる㊱国際看護協力の発展に貢献でき る㊲国際看護協力の発展に貢献できる㊳国際看護協 力の発展に貢献できる㊴国際看護協力の発展に貢献でき る㊵国際看護協力の発展に貢献できる㊶国際看護協 力の発展に貢献できる㊷国際看護協力の発展に貢献でき る㊸国際看護協力の発展に貢献できる㊹国際看護協 力の発展に貢献できる㊺国際看護協力の発展に貢献でき る㊻国際看護協力の発展に貢献できる㊼国際看護協 力の発展に貢献できる㊽国際看護協力の発展に貢献でき る㊾国際看護協力の発展に貢献できる㊿国際看護協 力の発展に貢献できる
20	修士課程国際看護学実習の経 緯と学部一貫コースの展開	報告	田代亜子 他1名	2007	看護開発を目指している開発途上国の国々へ の有知な看護技術人材を育成するために卒前卒中から卒 後までの大学院修士レベルの人材育成がある いは看護開発を推進することである	国際看護の系統的教育的 プログラムの基礎構築の報告	修士課程	学部での国際看護の科目と合わせて、国際看護の系統的 教育プログラムの基礎を構築している。

(文献11)。異文化での生活、組織や人間関係の理解に難しさを感じ、自己の価値観を変える柔軟性、活動調整能力、人材管理能力、活動推進のための周囲のサポートを得る能力を獲得していた(文献14)。国際看護・国際交流に対する興味・関心・学習意欲は、海外研修前準備後に高まり、海外研修参加後は全員が研修に対し満足していたことが明らかになった(文献15)。学生が直面した困難は、文化の違い、コミュニケーション、ボランティア活動の参加の仕方、異文化に伴う心身疲労、看護ケアの準備不足や日本と異なる方法であった(文献10)。

国際看護学実習は、学生に蓄積された国際看護学の基礎的理論的な知識を具現化するのに効果的な教育方法のひとつで、看護基礎教育で学ぶ本質や看護のあり方を効果的に体験でき、国際性の育成のための早期体験としての役割を有していた(文献18)。

大学院教育においては、国際看護コラボレーターに必要な能力および活動への影響因子として「基礎的資質と知識」と「国際協力を展開する上で求められる能力」大別される55カテゴリーを抽出された。また、教育目標7項目を定めた教育プログラムを作成した。教育目標は、①国際看護に関する基本的資質を基に専門的な知識を深める②国際協力専門分野における看護課題に対して、異なる文化、社会・経済、保健医療看護システム等をふまえて的確なアセスメントができる③協力相手国の看護ニーズに対応した協力・支援計画ができる④カウンターパートと協力関係を築き、実践モデルとなり、相談、教育的機能を果たすことができる⑤目標達成のため人的、物的資源を活用、開発し、課

題を解決へと方向付けることができる⑥国際看護協力の成果に対する評価研究ができる⑦協力相手国の独自の方式による看護開発を支援できる、の7項目である(文献19)。

2. 学生の国際看護学に対するイメージや意識に関すること

看護学科3年課程の108名の学生を対象にした国際看護論の授業後アンケート結果によると「関心事項」は109件の回答があり、諸外国の保健事情や生活、教育に関する事項が多かった(文献2)。「看護の役割」は110件の回答があり、疾病予防、健康教育の必要性が最も多かった。学生41名を対象にした研究では、多くの学生は講義終了後に自身に変化があったと回答し、視野の広がりや多様性の気づき、世界に対する思考の深まりなどの効果があった。ほかに、国際医療や海外についてもっと知りたいなどの興味関心を引き起こす効果もあった(文献3)。124名を対象にした看護学教育における国際交流活動に関する学生の意識調査では、海外志向の学生が多いことが明らかになった(文献4)。受講前の学生の「国際看護」に対するイメージを調査し、学生の抱く国際看護への認識を分析した研究では、最も多い国際看護のイメージは、途上国の医療支援であった。学生の認識や関心は総じて高く広い視点から捉えられていた。授業提供側の準備が不備であることを課題として指摘している(文献7)。

3. 教育機関の国際性を備えた看護職育成の取り組みについて

2009年にわが国の看護系教育機関(大学20校、短期大学7校、3年制専門学校97校)

124校を対象に行われた調査では、教育機関により、英語教育が量的・質的に異なる傾向があることが明らかになった（文献17）。

2013年12月～2014年1月にかけて中越によって行われた調査によると、全国看護系大学72校の国際看護および国際看護関連科目のカリキュラムについて、学部教育においてのみ国際看護・国際看護関連科目を開講している大学が51校、学部と大学院両方で開講している大学は18校、どちらも開講してい

ない大学は3校であった。大学院のみで国際看護・国際看護関連科目を開講している大学はなかった。学部教育で、国際看護・国際看護関連科目を開講している69大学での必修・選択科目別では、必修科目として約70%、選択科目では約90%、また、海外演習は約70%で開講されており、必修科目としての国際看護が学部教育の授業科目として定着してきていることが推察される（文献16）。

V. 考 察

1. 分析対象とした研究文献の概要について

今回の研究で分析対象とした研究文献が、資料・報告・実践報告が中心となったことは、2008年の中央教育審議会や2011年の文部科学省の指針がだされてからそれほど年数がたっていないことが関連していることが推測された。

海外体験（研修）による学びの効果や困難および学生の国際看護に対するイメージや意識に関することについて明らかにされていた。多くの看護系教育機関が、学生の反応・学びを集約して教育目標を明らかにしようと考えている。しかし、共通した教育理念や教育目標は見出すことができなかった。このことから、多くの看護系教育機関が、国際性を備えた看護職の育成のために、コンピテンシーモデルの提示およびコンピテンシーを育成するための教育モデルを、明確にできずに試行錯誤の段階であり、国際看護学に関する基礎教育では、コンピテンシーモデルの構築

および能力開発という点で、いまだ不十分であることが推測される。

2. 海外体験（研修）をもとに国際看護について明らかになったこと

国際看護とは ① 国際協力としての地域保健ケア・母子保健ケア ② 国際協力としての医療機関における技術協力 ③ 災害時緊急援助における看護 ④ 看護教育への支援 ⑤ 看護・医療制度構築のための連携 ⑥ 在留外国人等、異文化を背景に持つ人々への看護を含むものといえる⁷⁾。

海外体験（研修）をした学生は、自国とは異なる国の保健医療施設見学・講義・レクリエーションによる交流・ボランティア・演習などにより、発展途上国への関心を深めていた。また、異文化での生活、組織や人間関係の理解に難しさを感じ、自己の価値観を変える柔軟性、活動調整能力、人材管理能力、活動推進のための周囲のサポートを得る能力を獲得していることが明らかとなった。看護学

教育において、学習意欲が学習活動に、学習活動が学習成果とそれに対する満足感に影響し、それらはまた学習意欲へと循環するとされる⁸⁾。それを裏付けるように海外体験（研修）をした学生の満足感の高い傾向がみられた。また、学生は海外体験（研修）において困難も同時に感じていた。しかしながら、学生は困難を感じながらも複数の能力を獲得し国際貢献をしたいと動機づけになっていたことから、海外体験（研修）は国際性を備えた看護職の育成のために効果的な教育方法であることが示唆された。

3. 学生の国際看護に対するイメージや意識に関すること

「国際看護」に関する講義を受講後、視野の広がりや多様性の気づき、世界に対する思考の深まりなどの効果があった。ほかに、国際医療や海外についてもっと知りたいなどの興味関心を引き起こす効果もあったことが明らかになった。国際看護は、国や地域、民族間の保健医療・健康・看護の格差是正と多様な文化・価値観共存とを究極の目的として、一国の看護職者だけでは解決できない看護や保健上の問題、および世界共通の看護課題に取り組む学問⁶⁾である。自国以外の保健事情や生活、教育に関心を持ち、看護の役割として、疾病予防・健康教育の必要性を認識でき

ることは、中央教育審議会が学士力として唱える多文化・異文化に関する知識の理解につながっていくことが示唆された。

4. 教育機関の国際性を備えた看護職育成の取り組みについて

中越ら⁵⁾は、わが国の看護基礎教育学、助産師教育学における学習目標は明文化されていないことをわが国の国際看護学教育の課題として指摘している。看護系教育機関において、英語教育にのみに注目しても施設間の差が明らかになった。必修科目としての国際看護が学部教育の授業科目として定着してきていることが推察され、共通した学習目標の明文化は重要な課題と考える。

在日・来外国人も多くなり、日常的に多国籍の人々へのヘルスケアが求められ、グローバル社会における人材育成が急がれる。これからの看護は、互いの生活している文化に敬意を払いつつグローバルにどう協力していくかが重要となる。丸井らも、国際看護においては、世界の多様な文化を考慮した看護を考え、実践することは必要不可欠と主張している⁹⁾。これまでの日本の看護の基盤となる教育を見直し、文化社会情勢に合った新たなるコンピテンシーモデルの構築は、将来を見据えた看護教育の変革の一途となる。

VI. おわりに

1. 国際看護学に関する基礎教育では、コンピテンシーモデルの構築および能力開発という点で、いまだ不十分であることが推測さ

れる。

2. 海外体験は国際性を備えた看護職の育成のために効果的な教育方法であることが示

唆される。

3. 自国以外の保健事情や生活、教育に関心をもち、看護の役割として、疾病予防・健康教育の必要性を認識できることは、中央教育審議会が学士力として唱える多文化・異文化に関する知識の理解につながっていくこと

が示唆される。

4. 必修科目としての国際看護が学部教育の授業科目として定着してきていることが推察され、共通した学習目標の明文化は重要な課題と考える。

引用文献

- 1) 林直子、田代順子、菱沼典子、有森直子、平林優子、平野かよ子：国際看護コラボレーターに必要な能力モデル構築と教育プログラムの開発、Journal of International Health, Vol. 23, No. 1, 2008、23-31
- 2) 中央教育審議会：学士課程教育の構築に向けて（答申）、文部科学省、2008
- 3) 大学における看護系人材の養成の在り方に関する検討会：大学における看護系人材の養成の在り方に関する検討会最終報告、文部科学省、2011
- 4) 厚生労働省：保健師助産師看護師学校養成所指定規則 看護師等養成所の運営に関する指導要領別表3、厚生労働省、2011
- 5) 中越利佳、森久美子、田中裕子、野村亜由美、城宝環：わが国の看護基礎教育における国際看護教育の現状と課題、愛媛県立医療技術大学紀要 11(1)、2014、9-13
- 6) 災害看護学・国際看護学 看護の統合と実践、医学書院、2015、210
- 7) 看護学概論、メディカ出版、大阪、2011、53
- 8) 杉森みど里、舟島なをみ：看護教育学、医学書院、東京、2012、211
- 9) 丸井英二、森口育子、李節子：国際看護・国際保健、弘文堂、東京、2012、3

<文献研究対象リスト>

- 1) 岡本亜紀、岡宏美、杉本幸枝、岡本直行：学生ができる国際貢献—2006年度カンボジア研修報告一、新見公立短期大学紀要、28、2007、183-189
- 2) 磯邊厚子、天岡憲子：「国際看護論」の授業後アンケートにおける一考察、聖泉看護学研究、3、2014、47-53
- 3) 高橋亮、高岡寿江、日隈ふみ子、倉鋪桂子：看護学科1回生に開講した「国際看護学」の効果に関する検討、佛教大学保健医療技術学部論集、9、2015、85-97
- 4) 西頭知子、月野木ルミ、カルデナス暁東、小林道太郎、小林貴子：看護学教育における

- 国際交流活動に関する学生の意識調査、大阪医科大学看護研究雑誌、4、2014、96-104
- 5) 入山茂美：日本人看護学生への国際保健看護教育科目の開講時期の検討、Journal of International Health, Vol.25, No. 2, 2010、113-119
 - 6) 吉水清、児玉豊彦、小栗清佳、藤本祐二、神崎匠世、梅崎節子、賀加貝、新地浩一：大学生の国際保健・国際看護のイメージに関する意識調査～日本・台湾・フィジーにおける比較～、Journal of International Health, Vol. 26, No. 1, 2011、21-28
 - 7) 塚本三枝子：「国際看護」の授業展開に向けての一考察—看護学生が抱く「国際看護」へのイメージの分析—、看護教育研究学会誌、5(2)、2013、49-59
 - 8) 鈴木美恵子：カンボジアでの国際保健助産学実習に置ける大学院生の体験、日本赤十字看護大学紀要、25、2011、75-84
 - 9) 東田吉子、田中覚子、竹尾恵子：タイ国、プラバ大学における国際看護論の実施と学習成果、佐久大学看護研究雑誌、7(1)、2015、65-74
 - 10) 長松康子、田代順子、菱沼典子、松谷美和子、及川郁子、麻原きよみ、平林優子、大森純子：海外ボランティアを行う看護学生向けサービスラーニングカリキュラムに必要な情報と支援策—タイのコミュニティにおけるボランティア活動を通じた学習体験評価—、聖路加看護学会誌 Vol. 11 No. 1 June 2007、62-67
 - 11) 石井美里、溝口満子、佐藤幹代、岡部明子、高橋奈津子：米国メイヨー・メディカルセンター短期留学における学生の体験と学び、東海大学健康科学部紀要、13、2007、19-28
 - 12) 織田由紀子：英国における外国人看護師受け入れ研修、日本赤十字九州国際看護大学 IRR、6、2008、13-22
 - 13) Kishi Keiko Imai：米国私立総合大学看護学部の2007年訪問調査から、日本赤十字九州国際看護大学 IRR、6、2008、59-63
 - 14) 大澤絵里：国際協力活動中堅看護職のコンピテンシー獲得の過程—赤十字国際活動に従事した看護職の体験より—、日本赤十字看護大学紀要、25、2011、65-74
 - 15) 山口善子、寺岡貴子：海外研修を通しての国際看護教育—学習意欲の変化と研修満足度—、看護教育研究学会誌、5(2)、2013、42-48
 - 16) 中越利佳、森久美子、田中裕子、野村亜由美、城宝環：わが国の看護基礎教育における国際看護教育の現状と課題、愛媛県立医療技術大学紀要 11(1)、2014、9-13
 - 17) 口元志帆子、竹内久美子：看護基礎教育における英語教育の実態調査—全国看護系大学・短期大学・専門学校の調査結果から—、目白大学健康研究、2、2009、49-54
 - 18) 須藤恭子、樋口まち子：国際看護学実習前後の学生の意識の変化、Journal of International Health, Vol. 29, No. 4, 2014、277-288
 - 19) 林直子、田代順子、菱沼典子、有森直子、平林優子、平野かよ子：国際看護コラボレーターに必要な能力モデル構築と教育プログラムの開発、Journal of International Health, Vol. 23, No. 1, 2008、23-31

- 20) 田代順子、長松康子：修士課程国際看護学開講の経緯と学部一貫コースの展開、聖路加看護大学紀要、33、2007、111-115